華陽洞天北門の認識から第三十二小洞天良常山洞へ

土屋昌明

はじめに

『真誥』で華陽洞天の北門があるとされる良常山は、司馬承禎の『天地宮府図』で第三十二小洞天に配され、周回三十里、名を良常放命洞天といい、潤州句容県にあって、李真人が治めているとされている[*1]。これは、大洞天につながる入口が小洞天とされている、ということであろう。それゆえ、茅山の華陽洞天に入る五つの洞口の考察と、第三十二良常山洞の考察とは結びついてくることになる。

華陽洞天の五つの洞口が『真誥』においてどのように語られているか、それが歴史的に受容されて、現状でどのように認識されているかについて前稿で調べてみた[*2]。その考察によって、『真誥』にみえる許家の信仰において北門の地位が相当に高いことがみてとれた。しかし、前稿執筆時には北門の場所をはっきり把握できていなかったため、位置関係が曖昧な記述に終わっている。この点を考慮して、2013年3月の本研究の現地調査では[*3]、この北門と思われる洞口の探索をおこなった。その結果、北門とおぼしき現場を見いだしたので、本稿ではその知見にもとづいて『真誥』の記述を再考し、前稿の欠を補いたい。

注1…『雲笈七籤』巻27、中華書局、道教典籍選刊版617頁。

注2…拙稿「第八大洞天句曲山洞の現況と考察」『洞天福地研究』第3号、2012年3月25日、3～23頁。

注3…廣瀬直記「蘇州句容洞天福地調査記録」本誌所収を参照。

良常山洞の基本的特徴

『真誥』巻13によれば、許家は小茅峰の北の雷平山の西南に住んでいた。また『真誥』巻11のつぎの記述によれば、その許家の所在地は良常山の西南にあたる。

> 良常山の西南垂に住むのによい場所があり、司命君の往時の別宅があった場所である。ここも丹薬を調合するのによい。[*4]

これに対する陶弘景のコメントにこうある。

> 司命君は初めて長江を渡った時、ここに宅舎を立てて、親しく身を清めて神鬼と応答した。今按ずるに、「垂」という言葉の意味は、このような辺際ということだ。ここはきっと許長史の宅舎の後ろ、大横山の西に位置するのであろう。[*5]

注4…『東方学報』第70冊、「『真誥』訳注稿」596頁（京都大学人文科学研究所、1998年3月）。「良常山西南垂有可住處、是司命往時別宅處也。亦可合丹。」以下、『真誥』の訳文と原文はこれによりつつ、「訳注」として頁数を示す。趙益点校の道教典籍選刊『真誥』（中華書局、2011年9月）も参考にした。

注5…『真誥』巻11「司命初過江、立宅於此、以自蕩滌質對神鬼。今按、垂之爲言、如是邊際。此正應在長史宅後大横之西。」

良常山には洞天の北口があった。『真誥』はつぎのようにいう。

> 茅山の北側の洞窟の入口のある一山を良常山という。もともとやはり句曲山と連なっていて、同一の呼び名であった。*6

つまり、この良常山は小茅峰に続いた山であり、そこには茅山の洞天の北口たる洞口があり、その西に許家は住んで降霊をおこなったのである。ひとまず以上をまとめると、

①華陽洞の北口である洞口は、良常山にあった（これを良常洞という）。

②その西南に雷平山があり、許家は雷平山のふもとに住んで降霊をおこなった。

③そのあたりは、茅司命君が「親しく身を清めて神鬼と応答した」場所であった。つまり、外地から来た茅君が在地の「神鬼」と接触した場所であった。

④その在地の「神鬼」は、死者が山の神になったものと思われる。陶弘景は『真誥』巻11で「北良常洞は北側の大きな通用門である……北面の大洞窟は今もなお鬼神が通行しているが、真人や仙人はまったくこの五門からは出入りせず、あっという間に隙間のない所を通り抜ける」とコメントしている*7。ここでいう「鬼神」は、茅君が応接した「神鬼」と同一であろう。陶弘景は、大茅山の近くの東や西などの洞口は発見していないし*8、そこを「鬼神」が通行しているということはいわない。ところが、北の洞口は場所を認識しており、茅君がやってきたころと同様に「鬼神」が通行しているという。つまり、良常山には在来の山の神が住み、その通行口が良常洞だと信じられていたのではなかろうか。

以上のことから前稿では、北門たる良常洞は小茅山の北側に続く山にあり、雷平山の東側近くだと考えた。それゆえ、現在その付近にあるという柏子（一説に「枝」）洞・三官洞・老君洞が*9、それにあたるのではないかと考えたが、詳細は未確認であった。

柏子洞・三官洞・老君洞について

まず柏子洞・三官洞・老君洞が『真誥』でいう北口にあたるのかという問題である。これらの洞窟は、小茅山から良常山へと続く山脈と鬱岡山とのあいだに散在する。これに対する本研究の現地調査は廣瀬報告に詳しい。調査の結果、これらの洞窟は深く続く形状ではないように思われた。あるいは穴が土砂によって埋まってしまったのかもしれないが、北口にあたる洞窟ではないと考えられる。その根拠は、『真誥』にみえるつぎの記述が、これらの洞窟の地理

注6…同前「茅山北垂洞口一山、名良常山。本亦句曲相連、都一名耳。」「訳注」590頁。

注7…「北良常洞即是北大便門……北大洞猶有鬼神去來，而真仙人出入，都不由五門，皆欻爾無間」訳注582頁。

注8…現在立ち入り可能な華陽洞は、陶弘景のときはほとんど埋没しており、内部はごく小さな穴があるだけだったようである。陶弘景はそれを西門と比定していない。注2の拙稿を参照のこと。

注9…楊世華・潘一徳編著『茅山道教志』華中師範大学出版社、2007年、91頁。

と地形にふさわしいからである。

> 良常山の東南にも、また住むのによい場所がある。そのあたりに竈のような形をした積み重ねた石がある。竈形の石のあたりには寄生樹があり、その樹は曲がった蓋の形をしている。この場所はたいそう好ましいが、ただ奥深くないのが欠点である。そうとはいえ、それなりに条件を満たしている。*10

注 10…「良常東南又有可住處，其間當有累石如竈形，竈間或有寄生樹，樹如曲蓋形。此處至好，但恨淺耳，雖爾自足。」「訳注」597 頁。

現地の観察によれば、事実、これらの洞窟の形状は竈形をしており（廣瀬論文写真 29）、周囲の岩石は積み重なった形状となっている。

陶弘景は上文に対するコメントで、「北洞からの流水が回り、その左右はいずれも大路に近いので、奥深くないと言うのである」という *11。現在のこの場所には、良常山の東側にある人工湖（老虎洞ダム湖）と鬱岡山の西側をつなぐ林道沿いにある。つまり、かつて良常洞のある山（良常山）の東側に川があり、それがこの洞窟近くに続いていたのである。現在はそれがダム湖になってしまった。したがって、陶弘景がいう「大路」とは、鬱岡山の西側からこれらの洞窟の前を通って、良常山の東側へとぬける道のことであり、その道の左右両側は山があり、洞窟がこの道に近いことをいうのである。現地の地形は確かにそのようになっている。許家の降霊があった 4 世紀には、この道はさかんに利用されていたのであろう。陶弘景によると、陶弘景当時には廃れていたという。

注 11…「亦帶北洞流水，其左右並近大路，所以言淺。」

またここは、『真誥』巻 14 の許翽が昇天したあとのお告げにみえる場所と同一ではなかろうか。

> 雷平山の東北、良常山の東南、そのあたりに燕口山がある。三つの小さな山が寄り添った形をしているので、そう呼ばれるのである。方隅山とも呼ばれる。この山の下は、古人がこのあたりで九鼎丹を調合したことがあるところである。幽人がこの世にあった時、ここに住まいしたいと心に願っていた。現在もしばしばここを訪れて来るのである。方隅山の下にも洞室があって、方源館と呼ばれる。ここにも二つの入口があり、いつも外に現われている。いつもこれら五人がたむろしている。*12

注 12…「雷平山之東北，良常山之東南，其間有燕口山，三小山相隅故也。一名曰方隅。山下古人曾合九鼎丹於此間也。幽人在此（世）時，心（嘗）樂居焉。今常遊此，方隅山下亦有洞室，名曰方源館，亦有二口常見外也。常有此五人爲旅。」「訳注」688 頁。趙益校注 246 頁。

「三小山相隅」とは、この場所が西に一つやや高い山があり、それに続く尾根から、二箇所の岩場がベロのようにせりでていることをいっているのではなかろうか。「九鼎丹」を調合したのを、陶弘景はここのコメントで李明真人とみている。李明真人は鬱岡山のふもとで煉丹したとされる。この場所は鬱岡山の北側であり、現在の乾元観から徒歩で行ける範囲である。また、煉丹には水

が必要だが、この場所は水が豊かである。それゆえ、この場所と李明真人を結びつけたのであろう。したがって、冒頭にあげた司馬承禎のいう第三十二小洞天の治者たる「李真人」とは、この李明真人のことであろう。そうすると、第三十二小洞天は、この三つの洞窟があるあたりから、北の良常山に至る山あいの空間をいうのだと思われる。

「幽人」とは許翽のことである。ここでいう「方源館」は、二つの洞口がある柏子洞のことではなかろうか[*13]。「これら五人」とは、『真誥』巻14で語られる張祖常・劉平阿・呂子華・蔡天生・龍伯高という神仙である。彼らは大茅山の西南にある四平山の方台と呼ばれる洞室にいた。この方台は華陽洞天と通じ合っているとされる。

注13…廣瀬氏の報告では、『茅山志』も参照しつつ、この場所が『茅山志』巻6にいう方隅山の方隅洞と燕口洞である可能性を考慮しつつも、『真誥』巻14の陶弘景のコメントに、方隅山（燕口山）は大横山の「西南」に位置しているとある記事を優先して、この場所が『真誥』の上文にあたる洞窟のいずれかにはあたらないと推定している。

良常山洞について

上文には、許翽が生前にこの地に住みたいと望んでいたとあった。それはこの地が修道に適切であっただけでなく、北洞に近かったからではなかろうか。廣瀬報告で指摘されているように、許翽は北洞で昇天を果たした[*14]。『真誥』巻20につぎのようにある。

> ［許翽は］雷平山の麓に住まって修行一途に励み、早く洞室に遊びたいといつも心に願い、人の世には長く留まっていたくないと思った。かくて北洞に出かけてこの世に別れを告げた。[*15]

注14…小南一郎氏は、許翽の昇天は現実には服毒自殺だったと推定している。小南一郎「許氏の道教信仰―「真誥」に見る死者たちの運命」吉川忠夫編『六朝道教の研究』春秋社、1998年、23～53頁。

雷平山のあたりから良常山に行くとすると、良常山の西側の裾野を行くか、良常山の東側の前述の「大路」を行くかしかない。ところで現在、良常山の北端近くの斜面に、老虎洞と呼ばれる洞窟が存在する。この洞窟について本研究の2013年3月調査時のインタビューで、茅山道院の楊世華道長と陶金氏は、これを良常洞に比定していた。しかし、二人とも現地を調査していないとのことであった。そこで、楊世華道長の紹介で乾元観の協力を得て、陶金氏から提供された地図に頼りつつ、現地を探索した[*16]。現地は、良常山の尾根の東側の急斜面にあった。この地形からして、この洞窟こそが良常洞であると思われる。というのは、『真誥』巻11につぎのようにある。

注15…「居雷平山下、修業勤精、恆願早遊洞室、不欲久停人世。遂詣北洞告終。」

注16…調査の経緯については、前出の廣瀬報告を参照されたい。

> 良常山の北側の洞宮の入口は峰のところに当たっている。南へ二百歩行くと、秦の始皇帝が白玉二対を地下七尺に埋めたところがあり、その上に小さな平たい岩があって、峰の上で穴を覆っている。李斯が璧に文字を刻んだ。その文には、「始皇帝は聖人の徳あり、山河を平らげられた。青々とした川を巡守して、白き璧玉に銘文を刻まれた」とある。[*17]

注17…「良常北垂洞宮口直山領，南行二百步，有秦始皇埋藏白璧兩雙，入地七尺，上有小磐石在嶺上，以覆塞處。李斯刻書璧，其文曰：「始皇聖德，章平山河，巡狩蒼川，勒銘素璧。」「訳注」590頁。

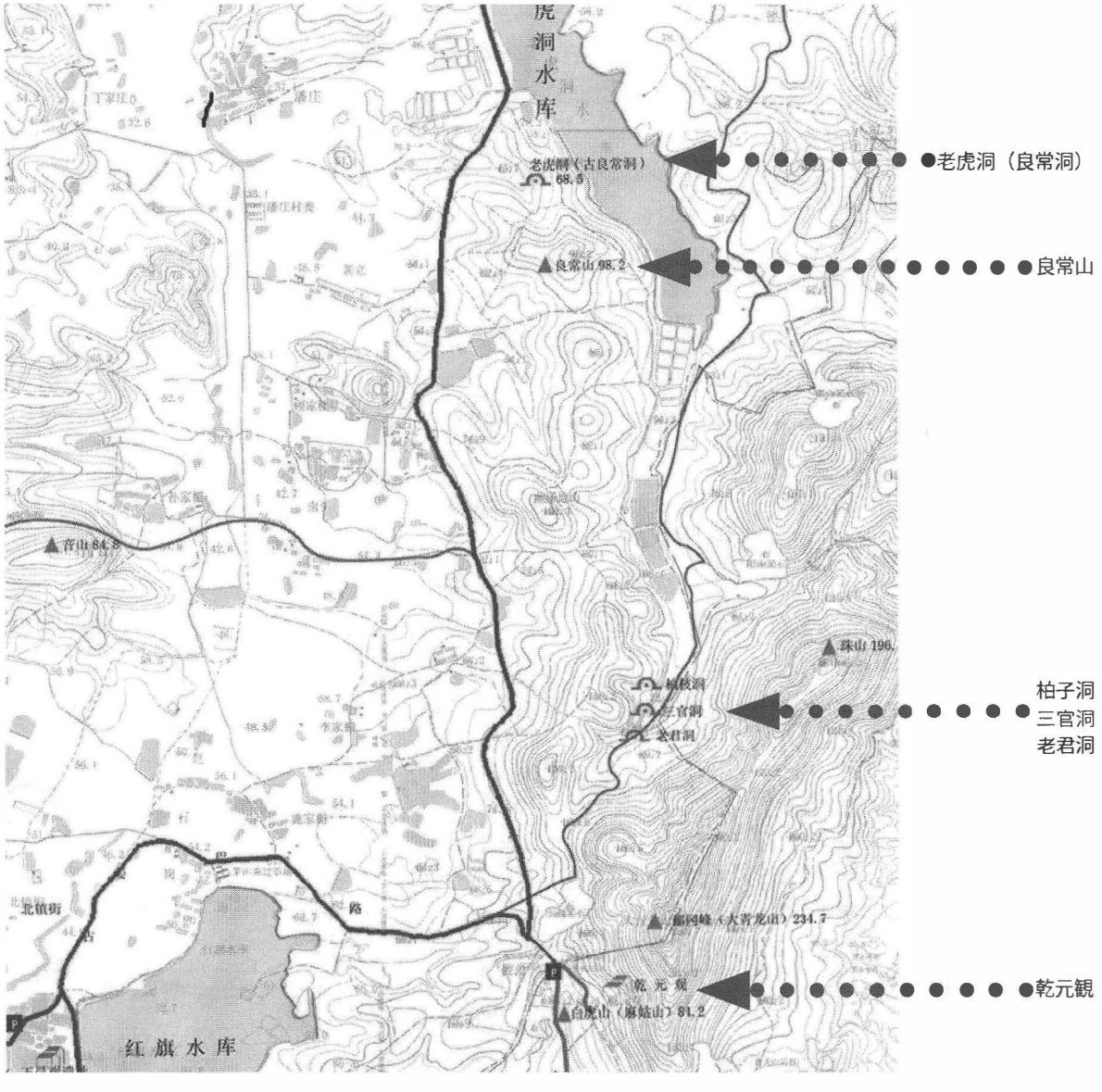
「良常山の北側の洞宮の入口は峰のところに当たっている」とあるが、現地の地形によれば、これは良常山の東側から登って、ちょうど尾根に至る直前に岩場があり、そこに洞口が開いていることをいっているのである。もし良常山の西側ルートで来て、背後から尾根を越えて洞口に向かったら、このような表現にはならない。したがって、当時山下にあった「大路」から良常山の山麓をあがってきて洞口に至ることができたのである（このルートは現在、ダム湖に水没している）。

まとめ

良常山および北洞をめぐる『真誥』の記事と現地の景観はマッチしており、それにもとづいて、当時の事情の若干が理解できる。許家が降霊をおこなっていた雷平山のあたりは平地であり、小茅山から鬱岡山へと続く尾根は、その近くでなだらかになっている。そこを抜ける街道から、鬱岡山の北側へとまわりこむと、良常山の東側と鬱岡山の西側にはさまれた道がある。これは、4世紀にはよく使用されていた「大路」であり、それを北上して西方向（左手）のせりだした岩場に、許翽が生前に住みたいと考えた（死後には祀られていた？）洞窟および建築物があって、方源館と呼ばれていた。その先に行って、大路から西に良常山をあがると、尾根の手前に岩場があり、岩場にあがると、斜め下に穴があって、その底に洞口が見える。これは現在、老虎洞と呼ばれているが、『真誥』の述べる地形の特徴から、これこそが北門たる良常洞である。その右側にもう一つ井戸のように垂直で深い穴があり、底は見えない。良常洞の洞口は東を向いており、太陽との方向関係が気になるが、本研究では調査できていない。

おそらく許翽は、修行の一環として北洞に出かける行為を日頃からしていたのではなかろうか。そのたびに、雷平山あたりから鬱岡山の北側にまわり、山間の「大路」を歩いて、柏子洞があるあたりで休んだり夜をすごしたりしたのであろう。良常洞は、始皇帝が白璧を埋めて巡狩したことが神のお告げで語られており、また茅君が来る前から「神鬼」が出入する門であった。おそらくは許氏の降霊以前から、在地の信仰において祭祀すべき場所とされていた。つまり、良常洞のある良常山から雷平山・小茅山の一帯は、茅山でもっとも古く茅君の信仰が受容され（さらに小茅君が主宰しているとされ）、それまでの在地の「神鬼」の信仰を茅君信仰が取り込んだ場所だったのであろう。華陽洞をめぐる洞天信仰は、良常洞を崇敬する在地の信仰を吸収するかたちでおこなわれたということもできるのではなかろうか。

じつは、柏子洞・三官洞・老君洞のあたりを踏査しているときは、北門を見

いだすことに拘っていたため、この三つの洞窟の茅山宗教空間における位置づけを考慮しながら観察することができなかった。しかし、鬱岡山下から歩いてきた林道を一山こえて降りていったそのあたりは、左右を山に囲まれてこんもりとしつつも、陽光は遮られておらず、北側の山は低くてやや開け、東北方向へと下がっていく地形であった。風が吹かないのに空気は新鮮で、野鳥が鳴き、穏やかな雰囲気に満ちていて、じつに気持ちがよい。調査参加者一同は、みな疲労していたにもかかわらず何となく楽しい気持ちになったものだ。洞窟のなかに自然石を削ったテーブル状の石があったので、私は乾元観の案内者に「囲碁はできますか」ときいた。彼は、できないと答えた。そんなことを思い出しながら、本稿を執筆してはじめて、あの場所から良常山に至る空間が第三十二小洞天だったのだと得心したのである。

地図（陶金氏提供）